

「子どもは大人の鏡。すなわち、子どもが置かれている状況は大人の置かれている状況の反映である。裏返せば、子どもの問題は大人の問題であることが多い。図書館利用に障害のある人へのサービスがそうであるのと同じように、児童サービスは特殊なサービスではない」

1 子どもたちの今を知る

(1) 子どもとメディア

乳児とメディア 『21世紀出生児縦断調査』

2005年度の全国図書館茨城大会児童の分科会のテーマ

「生きる力を育もう 情報化社会における子どもたちの読書」家島厚ほか

『いま、子どもたちがあぶない!』(斎藤惇夫、田澤雄作、脇明子、中村征子、山田真理子、古今社、2006)

『テレビに子育てをまかせていませんか?』(コモ編集部編、主婦の友社、2004)

幼児期から学童期

『コンピュータが連れてきた子どもたち』(戸塚滝登、小学館、2005)

『子どもの脳の発達 臨界期・敏感期』(榎原洋一、講談社(講談社+新書)、2004)

(2) ファンタジーはあまねく

ファンタジーの隆盛の意味、現実と非現実

ゲームとファンタジー

『魔法ファンタジーの世界』(脇明子、岩波書店、2006)

「団塊ジュニアはなぜファンタジーにはまるのか」(荷宮和子、新書館、2004、『大航海』No.49、特集 ファンタジーと現代)

(3) 子どもたちの現実

『なぜ、その子供は腕のない絵を描いたのか』(藤原智美、祥伝社、2005)

(4) 消費に踊らされる子どもたち

『子どもを狙え!』(ジュリエット・B・ショア、アスペクト、2005)

(5) 本を読まない大人、マスコミに踊らされる大人

『虚構の世界における男と攻撃性(増補改訂版)』(原忠彦、新思索社、1985)

『テレビジョンカルチャー』(J・フィスク、梓出版社、1996)

2 子どもにとっての読書の意義

『子どもが孤独(ひとり)でいる時間(とき)』(エリーズ・ポールディング、こぐま社、1988)

寄り添うことの意味

言葉とイメージと思考の関係

感情のコントロール

経験の蓄積

文化の力

『新平等社会』(山田昌弘、文藝春秋、2006)

『14歳の子をもつ親たちへ』(内田樹、名越康文、新潮社、2005)

『読む力は生きる力』(脇明子、岩波書店、2005)

閑話休題 私にとってのテレビと読書(時間があれば)

3 図書館のできることに、あるいは果たすべき役割

子どもたちの何を願うのか。

『図書館のめざすもの』(竹内愨編・訳、日本図書館協会、)

(1) 子どもたちの発達の基礎を作る

(2) メディア・リテラシーの確立

(3) 子どもと同じ目線で話す

(4) それぞれの年代での図書館の役割

(5) 子どもとは何者か

4 子どもたちの読書を豊かにするための戦略

(1) 子ども読書活動の推進

(2) 行政内部の連携・市民との連携

図書館内部での連携

(3) 図書館員の説明責任

読書への確信を育てる

(4) プロであることをめざす

資料を知り、子どもを知り、児童書のコレクションを作る。そして、地域社会を知り、子どもと本とを結びつける。また、出版の現状を知り、子どもの文化を知る。

『子ども100年のエポック』(本田和子、フレーベル館、2000)